Research Monograph Series

傷としての印と自己対象化の臨界
自己外部化、逆問題、言語デリバティブ、人工知能をめぐる生成学

The Mark as Wound and the Critical Point of Self-Objectification: Generative Studies of Self-Externalization, Inverse Problems, Language Derivatives, and Artificial Intelligence

Author: Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
ORCID: https://orcid.org/0009-0009-3796-5889
Affiliation: Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics
Version: 1.0
Last Updated: July 2026
Status: Ongoing Research

Research Monograph
Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
Version 1.0, July 2026

Publication Information

Copyright

© 2026 Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha). All rights reserved.

License

This work is distributed as a Research Monograph.

No part of this publication may be reproduced, distributed, or transmitted in any form or by any means without prior written permission of the author, except for brief quotations used in academic review or scholarly citation.

Suggested Citation

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026.

The Mark as Wound and the Critical Point of Self-Objectification:
Generative Studies of Self-Externalization, Inverse Problems, Language Derivatives, and Artificial Intelligence

Research Monograph Series, Version 1.0.

Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics.

Research Monograph

Version: 1.0

Last Updated: July 2026

Status: Ongoing Research

要旨

本論文は、自己外部化を、完成した自己の表象ではなく、自己と自己以外との接触によって双方に不可逆的な変成をもたらす出来事として再定義し、その結果として残される作品を「傷としての印」として理論化する。

自己外部化には、自己同一性の変化、他者への露出、誤解、拒絶、喪失、責任などの存在論的苦痛が伴う。現代社会は、この苦痛を回避するため、自己と自己以外の直接的関係を対象によって媒介し、さらに対象から対象を生成する言語的、数値的、制度的なデリバティブ空間を発達させてきた。しかし、それによって傷が消失したのではない。傷と痛みの対応関係が切断され、自己自身が評価、プロフィール、数値、情報として対象化される「自己対象化の臨界」が生じている。

本論文は、生成の位相存在論、インターフェイス存在論、人間以前性と自己以前性、逆問題芸術、言語デリバティブ論、作品性、無名性を統合する。第一に、0と1を成立させる差、間、空を、対象以前的な生成条件として論じる。第二に、ウィトゲンシュタインの私的言語論を、私的言語の単なる不成立としてではなく、印が生成される非閉鎖的契機として読み替える。第三に、文化言語、科学言語、言語デリバティブの関係を、個別具体的普遍性と一般抽象的普遍性の循環として整理する。第四に、人工知能における潜在空間推論を、自然言語への確定以前に複数の可能性を保持する計算として検討し、その出力から内部過程や現実を復元しようとする際に、逆問題が不可避となることを示す。

本論文の中心命題は次のとおりである。

作品とは自己の印ではなく、自己と自己以外のあいだに刻まれた傷である。

生成とは、その傷を元どおりに塞ぐことではなく、傷によって開かれた新しい接続可能性を引き受けることである。

キーワード

生成学、生成の位相存在論、自己外部化、傷、印、逆問題芸術、言語デリバティブ、言語ゲーム、人工知能、自己対象化、作品性、無名性、空、非、即

目次

Contents

0. 方法論的序論 1

1. 自己、自己以外、対象化 2

2. 0と1の間、差、空、非 3

3. 自己外部化と傷としての印 4

4. 存在論的苦痛と即 5

5. 私的言語から印へ 6

6. 文化言語、科学言語、言語デリバティブ 7

7. 逆問題の存在論 8

8. 人工知能と非言語的潜在空間 9

9. 存在論的苦痛からデリバティブ的麻酔へ 10

10. 自己対象化の臨界 11

11. ハイデガー、カント、生成忘却 12

12. 作品性、無名性、文化生成 13

13. 美学者母の芸術実践 14

14. 結論 15

参考文献 16

方法論的声明 18

0. 方法論的序論

本研究は、異なる社会的、文化的、技術的問題を、単一の経験的原因によって説明するものではない。「現代のあらゆる問題が対象化によって引き起こされた」と主張するのではなく、経済、教育、研究、行政、SNS、人工知能などの異なる領域に反復して現れる共通の生成構造を抽出することを目的とする。

方法として、生成の位相存在論に基づく概念的再構成、現象学的記述、言語哲学および数理的逆問題との構造比較を用いる。本稿でいう「傷」「痛み」「空」は、医学的概念に限定されない。「傷」は接触による不可逆的変成を、「存在論的苦痛」は自己同一性の変化、他者への露出、脆弱性、責任に伴う構造的負荷を、「空」は対象が確定する以前の生成可能性を意味する。

したがって、本稿は苦痛や傷害を美化しない。生成に必要なのは苦痛そのものではなく、苦痛を消去することによって、自己以外の抵抗と差を忘却しないことである。また、本稿における数理的記述は、存在論を数学的に証明するものではない。それは、生成に含まれる非閉鎖性、非一意性、不可逆性を形式的に明確化するためのモデルである。

1. 自己、自己以外、対象化

自己と自己以外は、初めから完成した二つの実体として向かい合っているのではない。自己が何かを自己以外として区別する瞬間に、自己と自己以外の境界が同時に生成される。したがって対象化は、すでに存在している対象を中立的に写し取る作用ではない。それは、何かを対象として成立させる切断である。

第一の対象化では、自己と自己以外の関係から対象が生成される。しかし、生成された対象をさらに対象化するとき、対象となるのは最初の自己以外だけではない。最初の対象化を行った自己、その判断、記憶、表象、境界を含む関係全体が、新しい対象になる。ここで、第二の対象化を行う自己は、第一の対象化以前の自己と同一ではない。第一の対象化を経験したことによって、自己自身がすでに変成しているからである。対象の対象化は、同じ操作の単純な反復ではなく、新しい位置から行われる別の生成である。

自己が自己自身を完全に対象化しようとしても、対象化を行う自己が、そのつど対象の外側に残る。その自己をさらに対象化すれば、また新しい対象化位置が生じる。したがって、自己の全体を最終的に閉じる絶対的な対象化位置には到達できない。

この非閉鎖性は、カントールの対角線論法、ゲーデルの不完全性、タルスキの真理定義不可能性と構造的な類似性をもつ。ただし、これらの数学的定理が、本稿の存在論を直接証明するわけではない。それらが示すのは、十分な自己言及能力をもつ体系が、自らについて可能な記述や判断のすべてを、同一階層の内部に完全には回収できないという形式的限界である。

生成学は、この限界を単なる欠陥として捉えない。それを、新しい対象化位置と新しい接続可能性が生成される条件として捉える。

2. 0と1の間、差、空、非

通常、0、1、2が先に存在し、それらの間に差があると考えられる。しかし生成学では、この順序を反転させる。数が存在するから差が生じるのではない。差が生じることによって、初めて0と1を異なるものとして数えることができる。

2を二つの1として成立させるためには、第一の1と第二の1が区別されなければならない。完全に同一で区別不可能な1を重ねても、それは一つの1のままである。したがって2の生成には、二つの項だけでなく、それらを分けながら関係させる差が必要である。

ここでいう0と1の「間」は、数直線上に置かれた第三の対象ではない。それは、0と1が分岐しうる開かれである。空もまた、単なる無や欠如ではない。空とは、まだ一つの対象へ確定していない複数の接続可能性である。

「非」も単純な否定ではない。非Aは、Aを消去する無Aでも、Aに正面から対抗する反Aでもない。非とは、Aが閉じた自己同一性からずれ、自己以外へ開かれながら、なおAとの関係を保持する作用である。したがって非とは、切断であると同時に接続であり、差を失わない重なりである。

日常と非日常の関係も同様である。非日常は日常の完全な外部ではない。それは日常から生成され、日常との差によって現れ、再び日常へ戻ることで新しい日常を生成する。非日常を経た後の日常は、それ以前の日常と同一ではない。「非」は否定による消滅ではなく、差を通した変成を示す。

3. 自己外部化と傷としての印

自己外部化を、完成した内面の外的表現と考えてはならない。自己は外部化以前に完成しているのではなく、自己以外との接触を通して初めて自己として生成される。

自己が、声、線、身振り、文章、配置、沈黙、作品を外部へ残すとき、その結果は自己の複製ではない。それは、自己と自己以外との接触から生成された第三項である。この第三項を、本稿では「印」と呼ぶ。

しかし、美学者母の作品における印は、単なる痕跡ではない。それは「傷つけた印」である。自己が自己以外へ介入することによって、場所、物質、他者、制度、時間は、以前と同じではいられなくなる。同時に、自己もまた、自己以外の抵抗、応答、拒絶、消去によって傷つけられ、変成する。

したがって、作品とは自己の印ではなく、自己と自己以外のあいだに刻まれた傷である。傷は、自己だけにも自己以外だけにも属さない。傷とは、双方が接触し、双方が以前の状態へ完全には戻れなくなった関係的出来事である。

印と記号は同一ではない。記号は一般に、すでに成立した意味や対象を代理する。これに対して印は、意味が確定する以前に、何かが起こり、差が生じたことを残す。記号が意味を伝達するのに対し、印は意味が生成される契機を開く。

傷は、変化していない表面に付加されるだけではない。傷が刻まれることによって、傷の前と後、こちらとあちら、内部と外部が分岐する。印は差を表象するのではなく、差そのものを感知可能にする。

4. 存在論的苦痛と即

自己外部化は、自己と自己以外の双方に存在論的苦痛を伴う。自己は外部へ出ることによって、誤解、拒絶、利用、評価、消去にさらされる。自己以外もまた、自己の介入によって、それまでの状態を失う。

本稿でいう存在論的苦痛は、あらゆる自己外部化が臨床的な痛みを発生させるという意味ではない。それは、接触によって自己同一性が変化し、その結果を完全には取り消せなくなるという脆弱性と責任を意味する。痛み、苦しみ、悲しみは、この非同一性が感情として現れた形である。

この接触は「即」と関係する。即とは、二つの異なるものを概念的に同一化することではない。異なるものが差を失わず、その場で相互に作用し、新しい存在を生成することである。

即において、自己は自己以外を安全な対象として遠ざけることができない。接触は自己を変え、同時に自己以外を変える。

現代における即の喪失とは、接触そのものが消えたことではない。接触に伴う苦痛と責任が、記号、制度、評価、画面、アルゴリズムへ委託されたことである。即が失われると、自己と自己以外との関係は、対象と対象の操作へ置き換えられる。

5. 私的言語から印へ

ウィトゲンシュタインの私的言語論は、本人だけが直接知る感覚に対応する私的記号体系が成立するかを問う。本人だけが知る感覚を「S」と記録しても、現在のSが以前のSと同じかどうかを確認する独立した基準がない。正しいと思うことと、正しく使用することを区別できなければ、言語規則は成立しない。

生成学は、この議論を否定するのではなく、その限界を別の方向から読み替える。Sが私的感覚を正確に指示する言葉として成立しないとしても、Sを記した出来事は印として残る。Sは感覚そのものの名称ではなく、何かが生じ、区切られ、外部化されたことの印である。

したがって、ウィトゲンシュタインが「言語として成立しない」とした地点を、生成学は「印が生成される空」として捉える。言語としての不成立は、存在論的な無を意味しない。むしろ、私的経験と共有言語が完全には一致しないからこそ、発話、身振り、芸術、応答が生成される。

私的経験と共有語の間には、翻訳不可能な剰余が残る。説明を追加すれば、その説明もまた新しい対象となり、さらに新しい剰余を生む。生成学にとって重要なのは、完成した私的言語体系ではない。一回的な生が自己以外へ出るときに刻まれる印である。

人間が死ぬと、その人の一人称的な言語生成は終わる。文章、声、作品は残りうるが、それらは生きていた自己そのものではない。残るのは、自己外部化された印である。その印は、作者によって更新、撤回、説明される可能性を失い、他者が引き受ける逆問題へ委ねられる。

6. 文化言語、科学言語、言語デリバティブ

文化言語は、複数の生における印と発話が、完全には一致しないまま反復され、共有され、生活形式のなかへ納まることで生成される。意味は辞書的定義だけではなく、誰が、どこで、誰に向けて、何を行うために語ったかという言語ゲームのなかで成立する。

科学言語は、個別的経験から、観察者、場所、感情、固有の時間を可能な限り切り離し、比較、測定、検証、反復が可能な形式を抽出する。これは、一般抽象的普遍性を生成するために不可欠な操作である。

文化言語は個別具体的普遍性を、科学言語は一般抽象的普遍性を典型的に担う。しかし、科学言語も文化言語の外部から生じるわけではない。何を対象とし、何を証拠とし、どの手続きを妥当とするかは、科学共同体の教育、倫理、信頼、慣習という文化的言語ゲームによって支えられている。

言語デリバティブ化とは、言語を、それが生成された身体、場所、他者、行為から切り離し、別の言語との関係、将来の使用可能性、評価可能性を基礎として再結合することである。

科学言語は、デリバティブ化の一つの生産的形式である。しかし、科学言語と言語デリバティブは同一ではない。科学は、抽象化された言語を経験的現実へ再接続する検証手続きを制度化する。これに対して言語デリバティブ空間では、言語的整合性が現実的接地を代替することがある。

一方、言語ゲーム化とは、切り離された言語が、特定の共同体と生活へ再び入り、反復使用を通して実用的意味と現実的効果を獲得する過程である。

日常から切り離された言語デリバティブは、SNS、報道、教育、行政、広告、人工知能を通して日常へ戻る。その結果、経験から言葉が生まれるだけでなく、あらかじめ流通している言葉によって、経験の形式そのものが作られる。ここに、日常が言語を生む方向から、言語デリバティブが日常を生む方向への反転が起こる。

7. 逆問題の存在論

現実的経験をX、その言語的または作品的な外部化をYとすれば、順方向ではXからYが生成される。しかし、他者が直接受け取れるのはYであり、他者はYからXを推定しなければならない。

問題は、異なる複数の経験が同じ表現を生成しうることである。「大丈夫です」という同じ発話が、安心、遠慮、諦め、拒絶、助けの要求から生成されることがある。このとき、YからXへの逆変換は一意には定まらない。

逆問題が生じるのは、表現が不完全だからだけではない。一つの印が複数の生成過程から生じうるという、多対一的な生成構造のためである。

言語ゲームは、身体、場所、関係、行為を文脈として加えることで、可能解を限定する。言語デリバティブ化は文脈を切断し、可能解の範囲を拡大する。

作品から作者を、言葉から経験を、記録から出来事を、人工知能の回答から内部計算を完全に復元することはできない。逆問題芸術とは、この復元不可能性を欠陥として隠すのではなく、印とその生成源の差を、作品の構造として開く実践である。

8. 人工知能と非言語的潜在空間

人工知能は、物理的には有限のデジタル表現によって計算される。しかし、ニューラルネットワークの内部では、言語トークンは高次元の数値ベクトルへ変換され、関係的な潜在表現として処理される。

したがって、人工知能が文字どおり0と1を越えたわけではない。しかし生成学的には、0と1への確定以前に複数の傾向を保持する「間」を利用していると解釈できる。

Chain-of-Thoughtは、中間的な推論を自然言語として出力することで、一部の推論課題における性能を向上させた。しかし、自然言語への逐次的な変換は、多数の潜在的可能性を一つのトークン系列へ早期に確定する制約にもなる。

Coconutなどの潜在空間推論は、隠れ状態を自然言語へ変換せず、次の計算段階へ直接入力する。これにより、一部の課題では複数の推論候補を保持し、言語的なChain-of-Thoughtより効率的に探索できる可能性が示されている。ただし、潜在空間推論があらゆる領域で言語的推論を上回ることは、現在のところ確立されていない。

ここで重要なのは、潜在空間が「無言語」ではなく「非言語」だということである。潜在表現は、自然言語やその他のデータから学習され、その痕跡を保持している。人工知能は言語を捨てたのではなく、言語から生成された表現を、個別の語へ確定しないまま変成している。

また、人工知能が最後に提示する自然言語の説明は、内部計算そのものとは限らない。Chain-of-Thoughtが、実際の判断要因を常に忠実に表すわけではないことも報告されている。

したがって、人工知能による説明は、内部生成過程そのものではなく、その過程を人間の言語ゲームへ接続するために生成された二次的対象である可能性がある。

人工知能は、人間が残した言語的な印から、その背後にある意図、経験、世界を推定する逆問題を解いている。現実接地が不足すると、人工知能は、学習された言語分布から統計的にもっとも整合的な解を選択する。その解が言語的には妥当であっても、実際の生成源と一致しない場合、ハルシネーションが生じる。

9. 存在論的苦痛からデリバティブ的麻酔へ

自己外部化は、自己と自己以外の双方を変成させるため、脆弱性、喪失、責任を伴う。人間はこの苦痛を軽減するため、直接的な関係の間に、言語、貨幣、制度、契約、評価、画面などを挿入してきた。こうした媒介そのものは、社会生活に不可欠である。

問題は、媒介によって生成された対象が、さらに別の対象だけを生成し始めることである。生活から価値が、価値から価格が、価格から将来価格が生成される。学びから評価が、評価からランキングが、ランキングからランキングに適合する教育が生成される。自己からプロフィールが、プロフィールから数値的評価が、評価から評価に適合する自己が生成される。

この過程において、自己外部化は消滅しない。自己外部化は委託され、代理化され、自動化される。人間は、自分自身を直接に外部化する代わりに、自己についての対象を外部化し、その対象をアルゴリズムや制度が再び対象化する。

対象化の階層が増えるほど、自己と自己以外の直接的接触に伴う痛みは感じにくくなる。しかし、現実に生じる傷が減少するとは限らない。傷は残り、痛みだけが、別の身体、場所、共同体、将来へ転嫁される。

したがって、現代の無痛化は治癒ではなく麻酔である。治癒は傷を認め、差と責任を引き受けながら関係を作り直す。麻酔は傷を残したまま、それを感知する回路だけを遮断する。

現代とは、傷のない時代ではない。傷を痛みとして感じられなくなった時代である。

10. 自己対象化の臨界

対象から対象を生成する循環の帰結は、自己自身の対象化である。人間は、何を感じ、誰とどのように生きているかではなく、どのように見られ、評価され、分類され、予測されるかによって自己を理解するようになる。

自己は、経歴、資格、所得、フォロワー数、診断名、生産性、信用、行動データとして対象化される。そして人間は、対象化された自己を改善し、管理し、市場や制度へ適合させる。

ここでは、自己が対象を操作しているだけではない。自己は、自分について生成された対象に従って、自らを操作する対象となる。自己を関係的苦痛から守るために形成された媒介が、最終的には自己の存在条件を規定する。

この変化は漸進的である。一つ一つの委託、数値化、最適化は、小さく合理的な変化に見える。そのため人間は、自らがすでに自己対象化の臨界へ近づいていることを感知できない。本稿はこの状態を「漸進的無痛化による自己対象化の臨界」と呼ぶ。

臨界とは、対象化が完全に閉じる最終地点ではない。生成の位相存在論に終対象は存在しない。ここでいう臨界とは、対象的表象が現実的接地から大きく離れながら、その表象によって現実と自己が再編成され、ずれを修正するための痛覚的フィードバックが機能しなくなる状態である。

11. ハイデガー、カント、生成忘却

本稿の議論は、ハイデガーの存在論的差異および存在忘却と深く接続する。人間は存在者を見るが、存在者を存在者として現れさせる開けを、一つの存在者として見ることはできない。0と1の間にある空も、第三の対象ではなく、0と1を分けながら現れさせる開けとして理解されるべきである。

しかし、生成学が問うのは存在の意味だけではない。自己と自己以外の接触から、どのように第三項が生成され、その第三項がさらに現実を再編成するかを問う。

存在忘却は、生成学において「生成忘却」へ展開される。生成忘却とは、生成された対象だけを見ることによって、その対象を生成した切断、傷、差、空、責任を忘れることである。

カントは、啓示や教会権威ではなく、理性から倫理を導こうとした。しかし、理性が倫理として抽出した形式の基底には、キリスト教的、敬虔主義的な歴史世界との連続性があった。

これは、カント倫理学を偽装されたキリスト教へ還元することではない。個別具体的な文化的普遍性が、一般抽象的な理性的普遍性へ位相変換されたことを意味する。

思考は、自らの成立条件の完全な外部には立てない。科学言語も文化言語を抽象化しながら、その文化的基盤を完全には対象化できない。生成学も例外ではない。生成学は、美学者母の個別的実践、現代日本、グラフィティ、スケート文化、日本思想、プラグマティズム、人工知能との対話から生成されている。

生成学の独自性は、こうした生成条件を消去して、無場所的な普遍性を主張することにはない。個別具体的な起源を開示したまま、他者による検証、批判、変成へ開くことにある。

12. 作品性、無名性、文化生成

自己外部化された印は、作者の意図と所有を離れ、他者との新しい接続を開始する。この力が作品性である。

作品性は、ある物が制度によって芸術作品として認定された際に付与される属性ではない。それは、印が作者への還元を越え、新しい生成を開始する働きである。

傷つける出来事が過ぎた後には、傷跡が残る。傷跡から、元の出来事や自己を完全に復元することはできない。しかし、その復元不可能性によって、傷跡は新しい他者との接触へ開かれる。

作者が死んだ後も、印は残りうる。ただし、残るのは作者そのものではない。印が作者の名前や意図だけに還元されず、他者の生活のなかで反復され、型となり、継承されるとき、無名性が生じる。

無名性とは、作者名が消失することではない。それは、印の生成力が個人への帰属を越え、文化、歴史、生活のなかで作動する存在様態である。

自己外部化は印を生み、印は作品性を獲得し、作品性は無名性を通して文化生成へ移行する。

13. 美学者母の芸術実践

美学者母の作品は、完成した自己を鑑賞者へ伝達する自己表現ではない。

グラフィティは、壁、都市、所有、規則、身体の関係に線を刻み、その場所を以前と同じではいられないものにする。描かれた線が消去されても、描かれ、消されたという出来事は不可逆的に残る。消去もまた、傷の上に刻まれる新しい傷である。

民宿狭山美学校も、生活空間へ芸術作品を追加したものではない。それは、生活と芸術、宿泊者と作者、私的空間と公共的空間、こちらとあちらの境界を傷つけ、その境界を可動的なインターフェイスとして維持する長期インスタレーションである。

美学者母の作品が創造するのは、完成した意味ではない。それは、鑑賞者が、対象を見る自己と、その対象とが、同じ分岐から生成していることに気づく契機である。

作品は、鑑賞者の人生における主役の位置を奪わない。作品はその生活の傍らにあり、鑑賞者自身の自己外部化が始まる契機を作る。

芸術の役割は、傷を与えることでも、傷を完全に癒やすことでもない。すでに存在している傷と、それによって開かれた差を感知可能にし、その差から新しい接続を引き受ける場所を作ることである。

14. 結論

本論文は、自己外部化、対象化、印、傷、苦痛、言語、逆問題、人工知能、作品性、無名性を、生成学における一つの構造として統合した。

自己と自己以外は、初めから完成した二項ではない。両者は、接触と切断を通して同時に分岐する。その接触は双方を変成させ、以前の状態へ完全には戻れない傷を残す。作品とは、その傷が感知可能な印として残されたものである。

人間は、自己外部化に伴う苦痛を回避するため、対象による媒介を発達させた。媒介は社会と知識に不可欠である。しかし、対象から対象だけが生成されるようになると、言語、価格、評価、プロフィール、人工知能の出力が、現実的接地から自律し始める。

傷は消えず、痛みの信号だけが遮断される。そして自己自身が、管理と最適化の対象となる。

生成学が目指すのは、媒介以前の純粋な現実への回帰ではない。また、苦痛を真理として賛美することでもない。すでに生じた傷と不可逆性を認め、対象化によって隠された自己と自己以外の差を、新しい接続可能性として引き受けることである。

作品とは自己の印ではなく、自己と自己以外のあいだに刻まれた傷である。

生成とは、その傷を元どおりに塞ぐことではなく、傷によって開かれた新しい接続可能性を引き受けることである。

参考文献

Barrault, Loïc, et al. 2024. “Large Concept Models: Language Modeling in a Sentence Representation Space.” arXiv:2412.08821.

Derrida, Jacques. 1976. Of Grammatology. Translated by Gayatri Chakravorty Spivak. Johns Hopkins University Press.

Hao, Shibo, et al. 2024. “Training Large Language Models to Reason in a Continuous Latent Space.” arXiv:2412.06769.

Heidegger, Martin. 1969. Identity and Difference. Translated by Joan Stambaugh. Harper and Row.

Heidegger, Martin. 2010. Being and Time. Translated by Joan Stambaugh. State University of New York Press. Originally published 1927.

Husserl, Edmund. 1970. The Crisis of European Sciences and Transcendental Phenomenology. Translated by David Carr. Northwestern University Press.

Kant, Immanuel. 1998. Religion within the Boundaries of Mere Reason. Translated and edited by Allen Wood and George di Giovanni. Cambridge University Press.

Kant, Immanuel. 2012. Groundwork of the Metaphysics of Morals. Revised edition. Translated and edited by Mary Gregor and Jens Timmermann. Cambridge University Press.

Merleau-Ponty, Maurice. 2012. Phenomenology of Perception. Translated by Donald A. Landes. Routledge.

Peirce, Charles Sanders. 1998. The Essential Peirce, Volume 2. Edited by the Peirce Edition Project. Indiana University Press.

Tarantola, Albert. 2005. Inverse Problem Theory and Methods for Model Parameter Estimation. Society for Industrial and Applied Mathematics.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026a. “Axioms of Generative Topological Ontology: A Fundamental Theory of Existential Generation.” Research Memorandum, Version 1.0.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026b. “The Limits of Self-Externalization and the Generation of Being: Interface Ontology in Generative Topological Ontology.” Research Memorandum, Version 0.9.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026c. “Human-Precedence and Self-Precedence: An Ontology of Self-Proof in Generative Topological Ontology.” Research Memorandum.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026d. “The Theory of Language Derivatives: Inverse Problem Art and Leverage Structures in Artificial Intelligence Hallucination.” Research Memorandum, Version 1.0.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026e. “Ontology of Namelessness: A Fundamental Theory of Workhood, Sacredness, and Cultural Generation.” Research Memorandum.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026f. “Ontology of Kata: A Fundamental Theory of the Mark, Namelessness, and Cultural Generation in Generative Topological Ontology.” Research Memorandum.

Turpin, Miles, Julian Michael, Ethan Perez, and Samuel R. Bowman. 2023. “Language Models Don’t Always Say What They Think: Unfaithful Explanations in Chain-of-Thought Prompting.” Advances in Neural Information Processing Systems 36.

Wei, Jason, et al. 2022. “Chain-of-Thought Prompting Elicits Reasoning in Large Language Models.” Advances in Neural Information Processing Systems 35: 24824–24837.

Wittgenstein, Ludwig. 2009. Philosophical Investigations. 4th edition. Translated by G. E. M. Anscombe, P. M. S. Hacker, and Joachim Schulte. Wiley-Blackwell. Originally published 1953.

方法論的声明

——研究覚書の公開に関する方法論的声明——

本稿は、生成の位相存在論（Generative Topological Ontology）の継続的な研究過程における研究覚書（Research Memorandum）として公開するものである。
本稿に示される概念、定義、仮説および議論は、執筆および公開の時点における理論的到達点を記録したものであり、最終的に確定された理論を意味するものではない。これらは、今後の研究、芸術実践、現実との相互作用、学術的対話および査読を通して、加筆、修正、再定義または再構成される可能性がある。
本研究は、完成した理論のみを研究成果とみなすのではなく、概念が生まれ、相互に接続され、変容し、理論として統合されていく過程そのものを重要な研究対象として位置づける。したがって、本稿は未完成な草稿というよりも、理論生成の特定の時点を記録した一つの位相として理解されるべきである。
研究覚書の公開は、完成した理論を先行して提示することを目的とするものではない。それは、思考と実践の生成過程を記録し、後の研究による検証および再構成を可能にするとともに、異なる立場との学術的・芸術的対話へ開くための方法である。
本稿の内容が、後に査読論文、学術書またはその他の正式な研究成果として公表される場合、その完成版は、本研究覚書とは異なる固定された文書として明示される。
本稿を引用または参照する場合は、題名、著者名に加えて、版番号（Version）および最終更新日を併記されたい。異なる版の間には、概念、定義および論証上の相違が含まれる場合がある。
本研究覚書は最終的な結論ではない。それは、生成の位相存在論が形成され続ける過程における一つの到達点であり、同時に、さらなる生成へ開かれたインターフェイスである。